

# 『水俣学研究序説』 原田正純・花田昌宣編

二〇〇四、藤原書店

評者：池田光穂

(大阪大学コミュニケーションシヨンデザイン・センター)



特集：相思社自家出版物販促強化特別号 & 水俣病事件関連書籍の辛口書評

論社、二〇〇四(二〇〇七)の三巻と内容的に重なるものがある。研究序説という仰々しいタイトルが本書には冠されているが、編者らの思いはむしろ「学」という権力の負の側面を極小化したい配慮で満ちている。

ある図書検索で調べてみると、書名に「水俣学」と入った本やブックレットは合計一〇種類あり、その初出は二〇〇二年である。編者らは熊本学園大学の中に水俣学の研究拠点を作ろうとしてきた。本書に収載されている幾つかの論文は、この後に

公開された『水俣学講義』(日本評

言うまでもないが、水俣学とは当世流行りの地域学や地元学という類のものではない。水俣病事件に関するさまざまなこれまでの学問が犯してきた偏向や狭隘化を批判し、総合化という回路を通して、その袋小路から脱却する試みの場(＝空間)の理念の提唱である。この理念は編者の一人である原田正純による序章

や、巻末を飾るシンポジウム記録の発言のいたるところで主張されている。水俣病事件を取り扱う学問を集結させる……この試みは先の『講義』シリーズできちんと成果は出ている……だけでなく、そこに集い共に議論と対話を重ねること、それぞれの学問が自ずと発揮する狭隘化やセクト主義、あるいは既存の政治権力との妥協を、拒絶しつつ自由になることである。この新しい精神性の提唱と(場の提供)に評者は敬意を表する。

水俣学の実質的な提唱者である原田は、シンポがおこなわれた九九年

財団法人  
水俣病センター  
相思社

102



Eメール…info@soshisha.org  
ホームページ…http://www.soshisha.org

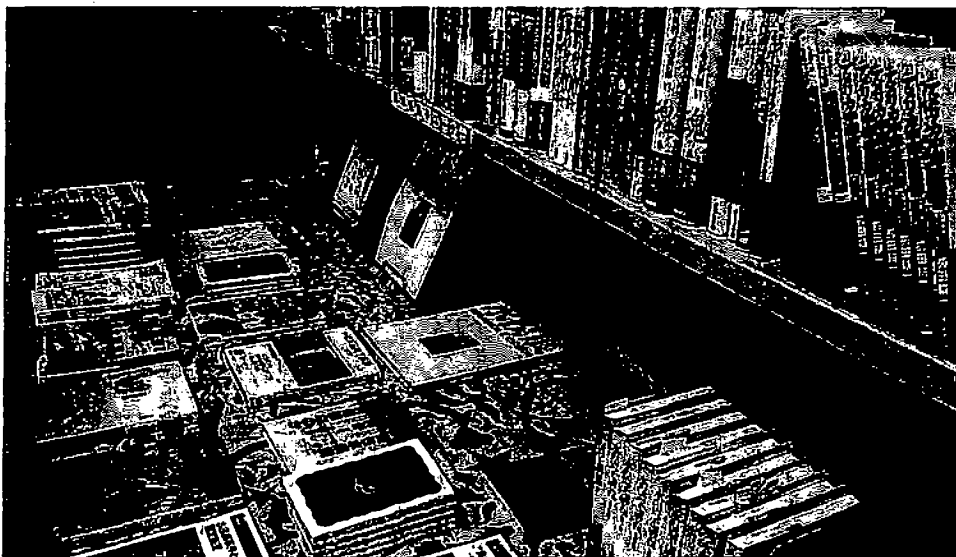
# ごんずい

G O N Z U I

緊急抗議！ 「保健手帳」 窓口を閉鎖するな！

特集 相思社自家出版物販促強化特別号  
& 水俣病事件関連書籍の辛口書評

池田光穂／高嶋由紀子／平井京之介／友澤悠季／関礼子／弘津敏男／4 p～19 p  
相思社自家出版物紹介／20 p  
水俣病歴史考証館取り扱い書籍一覧／22 p  
特別販売セール／24 p  
ビルマ報告／坂西卓郎／27 p



水俣病歴史考証館の書籍棚

当時、まだ生まれてもない……冒頭で述べたように文献的誕生はその三年後だ……この学問の行く末を危惧している。つまり(一)ひとつの学問として権威化する、(二)学派形成のように専門特化する、(三)現場から離れて研究室でのパズル解きのように学問オタク化する、そして(四)ときの政治権力に奉仕するようになる。これらから自由になれというのだ。全く「異議ナシ！」と言いたい。ただしこれらは、それを要約した評者自身の表現であり、原田の表現ではないことをお断りしておこう。念のため。

原田はこの実践理念に「学」と

附すことを躊躇している。原田はフィールド医学の立場から水俣病事件に深く関わり、実質的に当事者としてまで言える資格をもっているかのようになっている。その第一人者・原田においてすら、自らが学んできた学問観を崩壊させた川本輝夫の一連の根源的質問に、今なお明瞭な回答ができないからである。この川本

の問いから、評者が理解した趣旨はこうである。専門家と非専門家の認識の違いは、学知の深さによって峻別されているのではない。その違いは学問がもつ政治権力性によって、虚構として維持されているに過ぎない。現場からものを考える人は、そのような形式に拘束されていないので、理不尽な学問に対して根源的な再考を促すことができる。フィールドという現場において、専門家はなぜ素人たちの情念に身をまかせ、彼／彼女らの経験知に耳を傾けないのか。そういう悲痛な訴えを原田が意識していることは、一連の発言から容易に推測することができる。

だが、時の権力に奉仕する「大学を解体せよ」と言ったかつての学生たちは、今や社会管理の重要な地位につき、他方、今日びの若者は「学問の高邁な理念はどこ吹く風」と単位取得に専念する。あるいはかつての学生気質からは想像もできないのだが、最近の学生は結構マジメにポラントピア活動に専念したりも

する。これも言い方は古いが、昨今の「新人類」には、社会闘争への参加を呼びかけるパトスII情念を持ってとも、諸悪の根源たるリアルポリテイクII現実政治に革命的警戒心を失うなど言っても絶対に通用しない。

いま大学では、まさに専門家と非専門家の間の(コミュニケーションの障害)を取り除くべく、科学技術コミュニケーションやコンセンサス会議、さらにはサイエンスショップなどが構想されている。それを組織存続のための改革の目玉にしようと思わされている。このような試みを支援する文部科学省の当局関係者は、密室化・オタク化しモラルハザードの温床になっている科学者集団を反省自覚させ、ステイクホルダーたる(市民の皆様)へ説明責任を果たさなくてはならないと説教する始末である。

しかし本書中のシンポの発言者が本書の巻末において正しく批判指摘

するように、公害教育は環境教育へとそのイデオロギーを脱色中和されただけではない。かつて未必の故意を限りなく実践したと思われる行政関係者が、今ではそしらぬ顔で子供たちに環境保護の重要性を説くことも行われていると指摘している。そこにすっぽり抜け落ちているのは、研究教育者集団のリフレクシヴィ

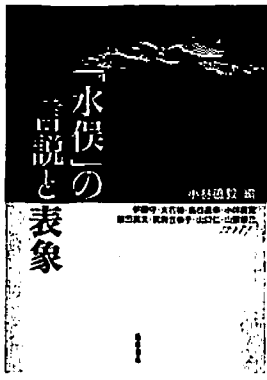
ティー(自己内省性)である。篤実な水俣学の積みかさねにより、水俣病事件の解明の科学は進歩したかもしれない。しかし、水俣病事件を取り巻く社会環境もまた変化しており、これらの間の(社会的測量)は欠かせないはずだ。水俣学がブランド価値として大学の知名度をあげることに貢献しているとした

ら、その利益は当然、水俣に住んでいる人間を含めたすべての生き物たちにも還元すべきだろう。次回の連続講義はぜひとも大学のキャンパスではなく(水股郷)とも記されたこともある水俣の地でおこなわれることを評者は強く希望する。

# 『水俣』の言説と表象 小林直毅編

評者：高嶋由紀子(水俣病センター相思社)

二〇〇七、藤原書店



言説分析は鋭利な刃物だと思ふ。人が語っていることの裏を分析しちやおうというのだから、あまり善人向けではない分析方法だろう。協力者の一人や二人に縁を切られることも覚悟しなきゃならないかもしれない。水俣病を語ることを生業とする相思社職員としては、時折、そんな

なアブナイ武器で一刀両断されることも必要だろう。ということ、歓迎と今後への期待を込めて、素人の外れな感想でも書いてみたい。本書はまなざしの研究である。水俣病や水俣病患者が何であるかではなく、メディアの中で「どう語られるか」に